

学 位 論 文 題 名

不在としての〈起源〉

－明治20年代におけるプリント・ナショナリズムの諸相－

学位論文内容の要旨

〔形式〕本論文は、序論、第一部（第一章～第三章）、第二部（第一章～第三章）、結論、注によって構成され、400字詰め原稿用紙に換算すると、その総計は、約677枚に相当する。

〔内容〕本論文は、明治20年代初頭に、「国民之友」や「日本人」といった雑誌に加え、「国民新聞」や「日本」といった新聞を相次いで創刊する民友社と政教社とが、言論の場で発揮した効力を批判的に検討し、更に、文学研究でもしばしば取り上げられてきた、この両出版社刊行の貧民ルポルタージュを、これらの新聞雑誌が形成する言説の効力との諸関係において位置づけたものである。

しかし、本論文は、単にそれだけにとどまらず、明治初年からのジャーナリズムの歴史を辿り直して、民友社と政教社にみられるこの言説の型が、いかなる経緯で形成されたかを示している。また、主に東京の都市政策の変遷と、それに関わる伝染病対策や貧民論、下層民論の歴史を幅広く踏査して、貧民ルポルタージュにおいて節合される複数の要素が、いかにして浮上してくるかをも究明している。その意味で、本論文は、ジャーナリズム研究や都市論などの成果を総合し、明治中期に言論の側から形成されるナショナリズムの諸相を明らかにするとともに、文学や歴史学の分野で別個に研究されてきた貧民ルポルタージュを、広範な領域との諸関係において問い直した研究といえる。

序論では、〈国民〉が語られ始める明治20年代における「ネーション」の歴史的編成を考察する意義を示し、第二次大戦後以降の〈国民〉認識を相対化するためにも、その当時の多様な文脈に即して、〈国民〉の歴史を問い直す方法を採用すると述べている。

第一部では、民友社と政教社の定期刊行物が呈示する〈国民〉の表象を明らかにするとともに、そうした表象が生まれるまでの歴史的経緯を、明治初年以来のジャーナリズムの動向を辿り直す形で検証している。

このうち第一章は、民友社と政教社の定期刊行物（「国民之友」、「国民新聞」、「日本人」、「日本」）の創刊初期における記事や論説（多くは徳富蘇峰、山路愛山、陸羯南、志賀重昂など代表的な論者によるもの）を対象にして、〈国民〉がいかに表象されるかを分析している。その結果、開明的な平民主義と国粹保存といった主張の対立にもかかわらず、当

時の社会の支配層を批判しつつ、その他、大多数の〈国民〉を代表する点では、相似する言説の型を双方の記事や論説が示していることを明らかにする。また、こうした上層批判と〈国民〉を代表する振舞いが、公平で中立的なメディアであるという権威性をこれらの定期刊行物にもたらずのみならず、これら定期刊行物の紙面を媒介とする想像の共同体、つまり知識人の公共圏が形成されてゆく様相を解明している。しかし、その一方で、識字率の低い大多数の〈国民〉をこれらの定期刊行物が相手にしておらず、その点で、〈国民〉の声を排除しつつそれを代表するといった関係が、〈国民〉と知識人の公共圏との間に形成されることを明らかにしている。そして、この関係を以後、「プリント・ナショナリズム」と呼ぶことを表明する。

第二章では、こうしたプリント・ナショナリズムの歴史的な編成を究明するために、明治初年からの、主に新聞を中心とした「不党不偏」という概念の変遷を辿り直している。ここではまず、明治初年代の「東京日日新聞」において、政府を支持し、民権派のどの結社にも偏らないことを意味した「不党不偏」が、明治10年代の自由民権運動最盛期に発刊される民権系の新聞では、政府からの独立を意味するものに変化する経緯を指摘している。またそれが、民権系政党の解党を契機に、政党からの分離独立を意味するようになるとともに、明治15年に創刊される「時事新報」が、政治に限らず学者社会や商工界など、あらゆる〈界〉からの独立を宣言するにいたって、本格的な中立のメディアが形成され、それが多くの新聞に共有され始める点に着目する。更に、この中立性が、すべての〈界〉から独立するが故に、すべての〈界〉に等しく関心を注ぐことをも意味し、そこに潜在的に「全国民」をカバーするメディアが形成される事情を明らかにしている。そして最後に、民友社と政教社の定期刊行物が、こうして言論上で成型化される潜在的な「全国民」を、〈国民〉の表象として顕在化したことを示している。

続く**第三章**は、プリント・ナショナリズムのもう一つの要素、〈情〉の効能について論じた箇所である。この〈情〉は、〈国民〉の基底にある共通の情動として、プリント・ナショナリズムが見出すものであり、したがってそれは、貧と富、中央と地方、官と民といった対立を止揚し、あくまで言論上のことではあるが、「全国民」という表象の形成を可能にするもうひとつの要素であると本論文は指摘する。その上、こうした〈情〉が天皇による一視同仁や慈愛とも、この民友社と政教社の新聞雑誌の記事・論説において、結ばれている点を明らかにしている。それはまた、〈国民〉の代表としての自分たちの言論を、天皇に重ね合わせることでありとともに、一君万民という国家体制を肯定することをも意味すると指摘している。そして、この一君万民の肯定において、それを実現する上での障害として、華族や貴族院など、社会の上層が問題化されることを明らかにする。

第二部は、民友社と政教社から相次いで刊行される貧民ルポルタージュと、その前史としての都市政策論や貧民論、下層民論などで問題化される〈民衆〉を中心に論じている。

このうち**第一章**は、松原岩五郎『最暗黒之東京』と桜田大我（文吾）『貧天地饑寒窟探検記』の分析がその中心をなす。ここでは、二葉亭四迷の貧民観やイギリスの貧民ルポル

タージュの影響を吟味しながら、この二著が、いずれも実際の貧民窟観察を重視しており、しかも、そうした場所への潜入が、登山や南洋探検などの探検の言説と通底するものであったことを明らかにする。また、そのような探検を賞賛する紙の上での共同体として、民友社と政教社の定期刊行物が成型化した、中間としての知識人の場があったことに注意を促している。

第二章では、こうした貧民のイメージがいかにして形成されたかを明らかにするために、明治初期まで遡り、多くの都市政策論や貧民論などを分析の対象としている。この章では、まず手始めに、明治14年の大火を契機に巻き起こる市区改正論において、貧民とそれ以外の人々の分離、すなわち貧富分離論が唱えられる事情が明かされる。更にその上で、そうした分離論にいたる歴史的な系譜として、福沢諭吉などの初期の天賦人權論では啓蒙の対象であった下層民が、社会進化論へと傾斜してゆく加藤弘之などによって、次第に自己管理能力を欠く遺伝的に劣った存在と見なされるようになる点に着目している。また、都市政策と密接な関わりをもった衛生学の言説が、都市の下層民を、伝染病に関する知を教える教化の対象から、教化が不可能であるが故に都市の中心部から追放すべき存在とみることに、大きく変容する点をも指摘する。そして、このような複数の言説の重層決定によって、貧民を視野の外におくことが次第に自明化される過程を解明している。

しかし、本論文はまた、こうした追放の言説が、明治10年代末から20年代初頭にかけて、大きな変容をみせる点をも見逃していない。この章の最後で、同じ時期に過激化する自由民権運動の温床の一つとみなされる貧民窟に対して、官民の双方から、貧民に対する宥和策が呈示されると指摘し、しかもこれが、暴動やテロに対する監視と表裏一体のものであったことを明らかにしている。

第三章は、前章で明らかにされた宥和と監視の言説が、民友社と政教社の定期刊行物で示されるプリント・ナショナリズムと、いかなる関係を結ぶかを論じたものである。このうち、宥和の面は、プリント・ナショナリズムにおいて、貧民への同情へと受け継がれるが、それはまた、第一部第三章で究明された〈情〉の効能と結びついて、〈国民〉＝共通の情動をもつものとして、貧民の内部化を可能にすると本論文は指摘する。他方、監視の軸は、暴動やテロの温床となることを防止する意味でも、貧民を訓育の対象と見なすことへと展開されるが、しかしそれが、言論の場からの下層民の排除（第一部第一章）と矛盾しない経緯をも、本論文はぬかりなく指摘している。つまり、訓育が民衆への一方的な教化であってみれば、下層民の声を排除しつつそれを代表することもまた、一方的な表象＝代表化であり、その点で、プリント・ナショナリズムは、民衆の側の声を一貫して聞き届けようとはしてはいないことを明らかにしている。換言すれば、それは、貧民を含む下層民が、自身の声を奪われたまま〈国民〉の内部に位置づけられ、監視と同情の一方的な対象となることであり、一方、プリント・ナショナリズムは、そのことによって〈国民〉を代表する言論の場としての権威を獲得するばかりでなく、民衆を言論の場から遠ざける権力装置としても機能していることを、本論文は強調する。そして、このことは更に、上層

と下層の統合を行う貧民ルポルタージュ（第二部第一章）が、統合の背後に監視と排除の視線を備えていることをも示しているという、本論文のもうひとつの重要な論点を導くことになるが、それは最後の結論において、論文全体の要約と論点の再確認・再整理を行ないつつ、強調されている点である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 中 山 昭 彦
副 査 助 教 授 押 野 武 志
副 査 助 教 授 権 錫 永

学 位 論 文 題 名

不在としての〈起源〉

－明治20年代におけるプリント・ナショナリズムの諸相－

本委員会は、上記の論文を審査するに際して、基礎的な手続きの面と内容面とに分け、本論文が新しい研究の方向を拓くものと評価できるか否かを検討した。基礎的な手続きとして検討したのは、明治前半期のジャーナリズムの歴史の中で、民友社と政教社の言論が占める位相を明らかにし、また、同時期の都市政策上の問題点となる下層民や貧民に関する言説との関係で、前記の両出版社から刊行される貧民ルポルタージュの意義を検討するに際しての、必要とされる文献資料の適否、当該分野の研究史の把握の度合いと参考文献の理解度、引用文献の正確さ等の点である。また内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各章ごとのテーマとその展開、方法の有効性、学術研究としての達成度などについてである。以下、それらの検討の結果と本委員会の評価を、要点をしぼって説明していくことにする。

まず基礎的な手続きに関してであるが、本論文は、上記のように多領域にわたる考察であるため、その個々の領域について、本論文が十分な量の文献を収集し、適切な理解を示しているかが検討された。その結果、本委員会では、貧民の位相の対極にあるものとして問題化される、天皇に関する文献収集に若干の不備が認められるものの、その他の領域に関しては適正な分量に達しており、各文献の解釈についても、妥当なものであるとの判断に達した。

また、本論文は、明治前半期のジャーナリズムの歴史的な展開と、都市の下層民、貧民対策の歴史、そして貧民ルポルタージュの出現と変容に関するものなど多領域にまたがるものであるため、上記の各領域における既存の研究に対する正確な把握と、それに対する妥当な評価と批判がなされているか否かが問題となる。本委員会では、この点に関しても、各領域に関する研究史の把握は公正なものであり、その評価と批判にも、十分な説得力が

あるものと判断した。

更に、参考文献の理解度と引用文献の正確さについてであるが、前者に関しては、言説分析やイデオロギー分析に関する欧米の理論を含め、個々の参考文献の特性と限界点とを適切に把握し、本論文が対象とする領域の性質に相応しい参照のあり方が示されているといえる。また後者に関しては、用字などにやや不正確な点がみられるものの、その度合いは許容範囲内にとどまるものであると考える。

次に内容面についてであるが、まず学術的な達成度という点からみれば、本論文の第一の成果は、これまで対立的に捉えられることの多かった民友社と政教社とが、その新聞雑誌の主要な記事や論説において、相似する言説の型を示し、しかも、その言説には、〈国民〉を代表しつつ排除する力学がひめられていることを明らかにするとともに、中間に位置する知識人の場ともいべき公共圏が、そこに形成される経緯を解明した点にあるといえる。また第二の成果としては、特に「不党不偏」をめぐる多くの新聞の主張を改めて検証し、あらゆる領域から独立するが故に、中立・公平を標榜する言論の場が形成された経緯を示し、にもかかわらず、そうした言論が、多くの〈国民〉の声を排除するといった権力性をもっていたことを究明した点があげられる。それに、従来、文学におけるジャンル研究および作家研究や、都市政策史、都市論、民衆史において別個に論じられてきた貧民ルポルタージュを、それらの成果を総合化する視座において捉え直し、更に先のジャーナリズムにおける知識人の公共圏で形成される〈国民〉表象が、貧民ルポルタージュにおいては下層民を対象として反復されていたことを論証した点に、本論文の第三の成果があるといえる。更に、官民の双方にわたる、東京を対象とした都市政策論や貧民対策論を幅広く調査して、下層民を視野の外におく段階からそれを内部化する方向への変容といった従来の歴史記述を批判し、下層民の内部化が救済の美名のかげに、暴動や伝染病の蔓延を抑止する監視の眼を用意するといった、複層的な権力機構の要請でもあったことを論証した点が、本論文の第四の成果といえるものである。

もっとも、知識人の公共圏と下層民の関係に議論が集中するあまり、天皇の御真影をめぐる国家の側のイメージ戦略との関係の記述が手薄になるなど、本論文にはいくつかの問題点がみられぬわけではない。しかし、独自のテーマを緊密な論理の展開と論文全体にわたる構成力、そして明快な方法論によって呈示したことに加え、上の四点において、本論文は十分な学術的達成度を示している。したがって本論文は、内容面においても、明治前半期のナショナリズムをめぐる知識人と下層民の関係に新たな照明を投げ掛けた研究であるとともに、近代の文学と他の文化領域との諸関係を解明した研究としても、きわめて優れたものであると判断できる。

本委員会では、以上の審査結果に鑑み、全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しい成果であるとの結論に達した。